

2018年11月7日

「日中健康寿命促進協会」設立趣意書

日本代表理事 西根英一
中国代表理事 莫 邦富

「ぴんぴんコロリ」は、長寿の国・日本において“患うことなく長生きして、人の手を煩わせることなくコロリと人生の終着駅に行く”を表す標語です。単に平均寿命が長いだけでなく、健康に生活できる“健康寿命の延伸”を目途に、そのための予防医療を推進しています。

世界一早く超高齢化社会を迎える日本では、“健康寿命の延伸”が個人や家族の健康課題として大切であると同時に、国民医療費（42兆3,644億円、2017年）の60%を65歳以上の高齢者が占める状況を鑑みると、国家財政にとっても最重要課題となっています。前年度比約1兆5千億円の医療費増は国公立大学年間運営費に同額で、国の未来成長を天秤にかける状況に例えられます。

同じような傾向は急速に高齢化社会に突入する中国、やがて高齢化社会を迎えるアジア諸国にも共通して見られます。日本社会の課題はその意味では、アジアでも次第に共有されていくと認識してもいいでしょう。一方、その悩みを解消するための日本社会の努力、試行錯誤、成功の経験、失敗の教訓も中国をはじめアジア諸国にとっても貴重な資産になるに違いないと信じております。

単なる長寿社会を作るだけでなく、質の高い長寿社会を目指すべきです。つまり“健康寿命の延伸”をいかに確保できるのかは質の高い長寿社会を実現するための重要なポイントとなっています。これは近年、日本がたどりついた最新の道標だとも言えるでしょう。

“健康寿命の延伸”には、食生活の改善、運動習慣の獲得、質の良い睡眠が欠かせません。生活習慣に限らずストレス等の生活環境への対策も求められます。また近年、ソーシャルキャピタル（ひとや地域とのつながりの資産）が健康長寿の重要因子となっていることも数多くの研究からわかってきました。つまり、勤労や学習の機会、社会との接点のある“生涯現役社会の構築”によって、カラダの健康、ココロの健康、キズナの健康を包括しつつ調和することの大切さが唱えられています。

ここで注目されるのが、健康寿命の延伸を果たすための“未病対策”です。中国は古くからこの未病に対する思想によって支えられています。医食同源などいくつもの豊かな言葉によって未病を表し、個々に最適化したと思う処方によって健康意識を高めてきまし

た。漢方薬、太極拳、自然療法などに結晶された伝統的な知恵はその努力の賜り物と言えるでしょう。

日本では、ヘルスプロモーションの旗印の下に各自治体で“未病対策”が実践され、それに応える“未病産業”がヘルスケアビジネスのなかで大きく成長しています。未病対策に求められるパーソナライズ（個別化）さらにオプティマル（最適化）の考え方こそが「健康哲学」となり、ビジネスの新規性と成長性さらに社会性、公益性を生む産業へと未病産業を進化させています。

いま日中の交流はハードからソフトの分野でも連携協力する時期がきています。「健康哲学」を礎にして、ソフト分野における共同研究、共同開発、共同運営などを推進し、そこから生み出されるシステム、技術、商品やサービス、設備、施設などは、国連をはじめ関係国際機構などの舞台を通して、日中両国だけでなく広くアジア圏ないし世界にも幸せをもたらすことでしょう。

日中健康寿命促進協会は、こうした「健康哲学」を共にする日中の会員企業と地域自治体の参画のもと、さらに、中国の関係団体、業界、学会などとも連携して、個別の研鑽と相互の連携により、従来できなかったモノをつくり、従来果たし得なかったコトを起こし、その物心両方の発展をもって健康寿命の促進を究め、両国民ならびにアジア諸国の人々の喜びを実現していきたいと願います。

以上